

長澤亮太先生を語る会スナップ

「偲ぶ会」に引き続き、「長澤亮太先生を語る会」が同じく講堂で開かれ、参加者はそれぞれ先生の思い出を先輩後輩、同級生同士で語り合うとともに、旧交を温めました。

菅井文明事務局長の開会のことばに続き、来賓を紹介しました。当日は、野平匡邦千葉県銚子市長（元建設省建設経済局建設振興課課長）、小野耕嗣宮崎県産業開発青年隊青友会会長、阿萬憲二同副会長、河野正光同事務局長、松尾茂生元建設大学校中央訓練所訓練科長、西田博同教官、溝口實同教官、植田峰仙同茶道講師が駆けつけてくださいました。

来賓を代表して野平市長は、自らを「中央訓練所の幕引きをしたときの担当課長である。取り潰しは前課長のときから決まっていた。わたしは介錯に来ました」と前置きした上で、「思い出の品々は一室に安置し、石碑も立てた。何とかなったかな」と当時の苦労語を披露されました。

短いひと時でしたが、長澤先生の遺影と隊旗に見守られながら、先生を偲び、そして先生の精神をこれからも大切に守り続ける決意を新たにしました集いとなりました。



大石哲也
産業開発青年隊
同窓会副会長



小野耕嗣
宮崎県産業開発
青年隊青友会会長



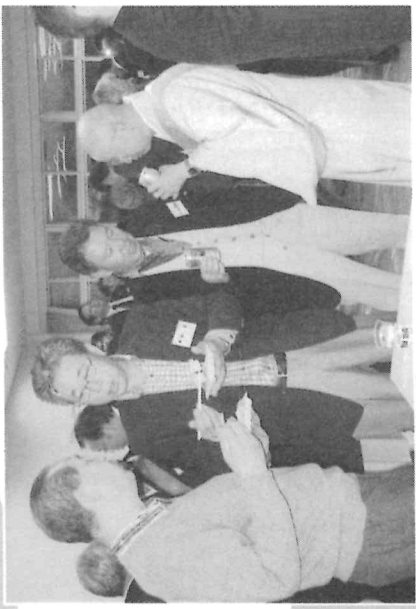
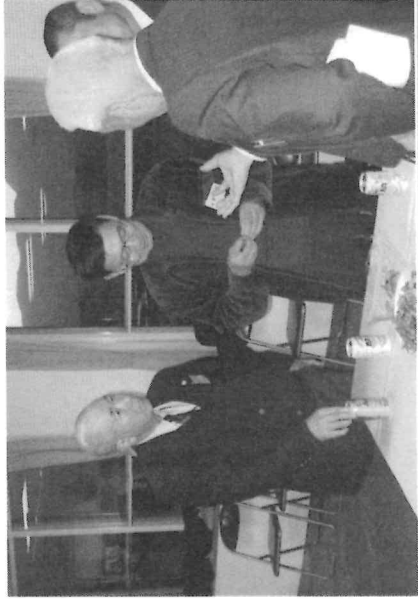
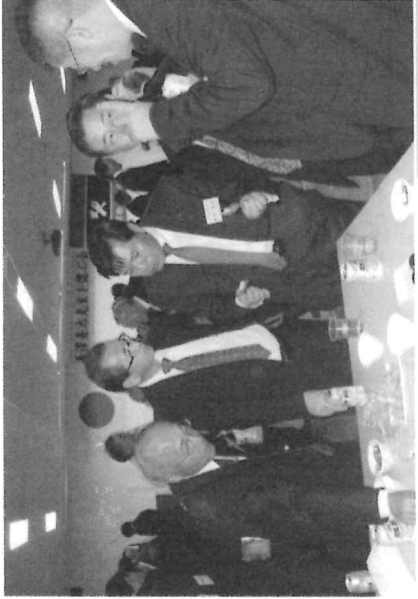
西田 博
元教官



野平匡邦
銚子市長



長澤亮太先生を語る会スナック



稿

寄

思ふ会開催に当たって、多くの皆さんから長澤亮太先生の思
い出をつづった文章が寄せられましたので、ここに掲載します。
(掲載は、あいうえお順。紙面の都合により小林長雄さんの文
章は一部略させていただきました)

感謝の気持ちで一杯

阿部賢一 (海外課程講師)

昭和37年3月、産業開発
青年隊富士吉田キャンプに
長澤先生をお訪ねした。

それが長澤先生、青年隊
諸君との四十年以上に亘る
関わりの始まりだった。

建設業の海外進出がまだ
賠償工事の時代、海外渡航
が制限されていた時代から、
長澤先生はブラジル進出を
計画、実行に移した行動派
であった。海外志向が長澤
先生と筆者との接点であっ
た。筆者は昭和41年から3
年間、南米へ仕事で出掛け、
その後、東南アジア、中近
東、米国などで仕事をした。
海外から休暇で帰国すると、

まず長澤先生に連絡を取り、
中央訓練所を訪れ、海外の
実情、日本の将来の方向に

夢を描く環境創りに感謝

石川祐三 (昭和45年度高等科
建設施工管理課程)

私が産業開発青年隊を知っ
たのは、海外開発のチャン
ピオンとして青年の教育訓
練をしている所が富士山麓
朝霧高原に在ると聞いた事
に始まります。自分に何が
出来るかを考えていた時で
あり、建設大学校中央訓練
所で長澤所長にお会いし青
年隊について話を伺い入隊
を決めました。

ペンとハンマーを旗印に

ついて熱い議論をするのが
いつものことだった。

そのような議論の中から
長澤先生は、筆者に「海外
課程」で講義する機会を与

全寮制で朝6時の起床点呼
から21時消灯点呼まで細か
な規律の中にありながらも
隊生活は、隊員自身による
自治組織で運営されていま
した。

大石哲也

(沖縄朝霧会会長
昭和47年高等科施工管理課程)

長澤先生、昨年(平成21
年)11月24日にお亡くなり
になったとのこと、今年の

えてくださった。「海外建
設実務」講義の準備のため
に資料収集・分析は、その
後の建設関係論文の執筆、
土木学会、新聞・雑誌への
論文発表の出発点になって
現在に至っている。感謝の
気持ちで一杯である。長澤
先生のご冥福をお祈りする。



その自治会は、総隊長、
寮長、区隊長、班長そして
班員で組織され個性のある
人が集まっていました。長
澤先生の思い出は、青年隊
での生活そのものであり、
機会あるごとに隊員を前に
理念を説かれていた姿が私

青年隊活動持続が報恩

3月に光森会長からのメー
ルで知りました。葬儀は、
息子さんが、我々には連絡
をしないで行ったようです
が、残念な気持ちが先立ち、
その時は何とも言えない気

の脳裏に焼き付いています。
かなり細分化された規律の
中にありながら隊員個々の
行動は、理に反しない限り
自由奔放に生活させていた
だきました。皆、長澤先生
の手の内で踊っていただけ
なのかも知れませんが。

貴重な青春時代の一時、
温かくも厳しくもあった指
導員、教官、所長に囲まれて
自由に語り活動させてくれ、
将来への夢を描かせる環境
を創って下さった長澤先生
に心から感謝しております。

特に現在の日本社会は長
澤先生のような人を強く求め
ているのではないでしょ
うか。

長澤亮太先生安らかにお
休み下さい。

持ちになりました。

私は、昭和47年度高等科
施工管理課程を卒業した後、
沖縄海洋博覧会の成功のた
めに、大手ゼネコンに就職
が決まっておりましたが、
出向の形で、開発庁沖縄総
合事務局南部国道事務所に

2年間勤務し、その後(社)産業開発青年技術協会で指導員を3年間、研修課長を3年間と中訓で計9年間お世話になりました。

隊員の時、技術協会職員の時も、長澤先生のご指導を受けながら成長させていただきました。感謝の気持ちで一杯です。

特に、予算折衝に同行させていただきましたが、「産業開発青年隊議員連盟」の先生方に青年隊予算の、復活折衝をお願いする際の説明に同行させていただきましたが、名だたる国会議

員の先生方に対する説明の時の気迫は忘れることが出来ません。日本国を憂い、青年の成長を願う気持ちがあつての気迫の行動でした。

陳情には、全国からありとあらゆる団体が自民党本部に来ておりましたが、9階の幹事長室まで駆け足で先頭を走って行かれる姿は、忘れることが出来ません。私も必死でついて行きました

たが、予算を獲得することの大変さを、まざまざと見られたことは、会社を経営するようになった現在もリーダーとして長澤先生の教えが生きております。

青年隊は、「心と技術と

体」を鍛える教育を目指して、全国に広まりましたが、時代の変化には勝てず廃校になってしまったことが残念で仕方ありません。

しかし、卒業生の心の中にその教育は生きております。卒業生のお一人お一人がある青年隊で受けた教育を仕事を通し、地域活動を通して広がっていくことが、長澤先生が一番



基礎工事 水道工事に取り組む隊員

今でも心のエネルギー

黒田鎮明

(中部ブロック会長・昭和47年度高専科修了)

長澤亮太先生のご逝去に哀悼の意をささげます。

富士山麓の長澤先生の下で3年間学んだ日々が、38年経過した今でも何かにつけ心のエネルギーになっています。

また、ご指導いただいた先生方、同窓の皆様方のご縁に感謝する次第です。

私にとって修了してからの思い出となっているものに、長澤先生の富士山修験道場での文武春の祭典(平成8年5月5日)があります。

前夜祭の直会は和気藹々とした武道談義が夜遅くま

で続いたのです。

そして、祭典当日は光森徳雄先輩の来賓の中で土橋聡氏の司会により進められました。

まず、神事として長澤先生の四方弘(能舞)、菊池不雙女史による法弓の儀、そして、水島紀子女史による琴演奏が行われました。続いて演武に移り、鈴木肇先輩の剣術組太刀、中村隆政氏の居合道が行われ、私

も居合道演武に参加させていただきました。

また、弘願寺清僧の方々による演奏もあり、最後に植田峰仙先生の御茶を頂いたのです。

諸武道もその源流を遡れば、古神道をふまえた修験道に達すると言われた長澤先生のお元氣なお姿が懐かしく思い出されます。

私は一昨年の5月から、インドネシア・カリマンタ

望んでいたことではないかと思ひます。

私は、お陰様で、全国に先輩、同期、後輩と日頃から楽しくお付き合いをさせていただいております。これからも、OB会を通して、全国にネットワークを広げて、青年隊活動を続けていきたいと思ひます。そのことが、先生から受けたご恩に報いることになればと思ひています。

どうか、長澤先生安らかに休み下さい。有り難うございました。

ン島でバイオ燃料になるジャトロファ栽培農園整備に関わっています。ジャカルタでは故西森先輩の義弟テグ・ブダイオノ氏ともお会いし、お話をする機会もありました。

建設省建設大学校中央訓練所・産業開発青年隊で学ばせていただいたお蔭で、さまざまのご縁をつくづくと感じているところです。

合掌

生んで育てて発展へ

小林長雄

(元中央訓練所職員)

小生、昭和49年4月から51年9月までの2年6ヶ月、建設省の職員として「建設大学校中央訓練所」に勤務しました。それまでの建設省における業務とは全くかけ離れた業務にて戸惑いもありましたが、長澤所長長気概旺盛の時期にて、自身の理念に基づく「産業開発青年

隊」の隊員育成教育に情熱をささげてみえる時期でした。

私が勤めた49年には、まだ地方隊の名残として、「北海道隊」、「福島県隊」、「長野県隊」、「香川県隊」、「熊本県隊」、「宮崎県隊」があり夫々地方で実践教育を受け、1ヶ月ほど中央訓練所に勉強に来ていました。

隊員の皆さんは、厳しい

環境の「根原」の地で全寮制のもと指導員の厳しいながらも優しい指導のもと「朝の点呼」から「夕べの点呼」まで「心と体」を鍛錬し、測量技術・土木技術・機械技術の「技」を学び「心・技・体」三位一体の教育を受けていました。

忘れがたい記憶が残っています。「樺術」の訓練が校庭で行われ講師の「わだつみ道宗？」が樺術の棒を不用意か偶然か落とされました。隊員が笑ったのでしょ

う。講義終了後長澤所長の一喝で全員その場で正座させられました。夕暮れになってもまだ座り続けています。見かねた総務課長が指導員に「もう許してあげたらどうか」と声をかけ指導員は長澤所長に許可を得たのでしょう。許しが出たとき誰もすぐさま立ち上がることはできません。何とか立ち上がった隊員が次の隊員を補助し全員立ち上がりました。足のすねは校庭の火山石と粒石跡が黒くぶつぶつと食い込んでいました。隊員に大丈夫かと尋ねると「大丈夫です、座らせる仕置きはいいです。国旗掲揚塔で立たされる仕置きは体温が下がり苦痛です。座っていれば体温は下がりますから:。」。こうして隊員たちはしたたかに精神を鍛えあげられていったのだと思います。

中央訓練所は、長澤所長が「生み」、「育て」、「発展させ」た事業であり、その事業の中で厳しく「心・技・

体の三位一体」を教育し、鍛え上げられた多数の隊員が育ち日本国内を問わず海外においても活躍し、発展の場を広げていることは周知の事実であります。

数年前会社の旅行で忍野八海を旅行したとき、訓練所付近の道の駅に立ち寄りしました。ずいぶん様変わりしていましたが、当時を思わせる建物も残っており、物陰から苦楽を共にした皆さんがひょっこり顔を出されそうない知れぬ郷愁を覚えました。

産業開発青年隊は、時代の趨勢もあり残念ながら幕を下ろしてしまいましたが、「生んで、育てて、発展させた」長澤所長、立派に足跡は残されました。

長澤所長を心置きなくお送りしてください。参会される皆さん方のご多幸と産業開発青年隊員皆様のご多幸をお祈致します。



寄稿



東高校造成工事キヤタピラ調整
土木実習 側溝型枠組み



青年隊の魂ある限り

鈴木 正

(昭和50年度高等科卒業)

このたびの、長澤先生の訃報に接し、衷心より死を悼み、お悔やみを申し上げます。

私は、昭和50年度、昭和51年3月に青年隊高等科を卒業いたしました、鈴木と申します。

現在、長年勤めました栃木市役所を、今年3月に定年退職をいたしまして、自宅療養をしながら毎日を過ごしておるところでございます。

私が、長澤先生と出会ったのは、今から38年ほど前で、昭和48年頃であり、ちょうどそのころは、田中角栄首相が日本列島改造論で、日本中が揺れていた頃であったように思います。先生は、中央訓練所の所長として若い青年像を、青年隊理念として教え、我々が学んでいたことが、今にもよみがえっ

てまいります。

そのとき、長澤先生が我々に教えて下さったことのひとつに、吉田松陰公のことがございます。当時、敷地の高台には松下村塾の分家があって、夜中に肝試しをさせられたことを、今でもよく覚えております。

先生の敬愛した松陰公の言葉を自分なりに解して申

しあげるとすれば、

「人の死は、好むべきものにあらず。亦、にくむべきものにもあらず。

道尽きて、心安んずるは、亦、すなわち、これ死所なり。

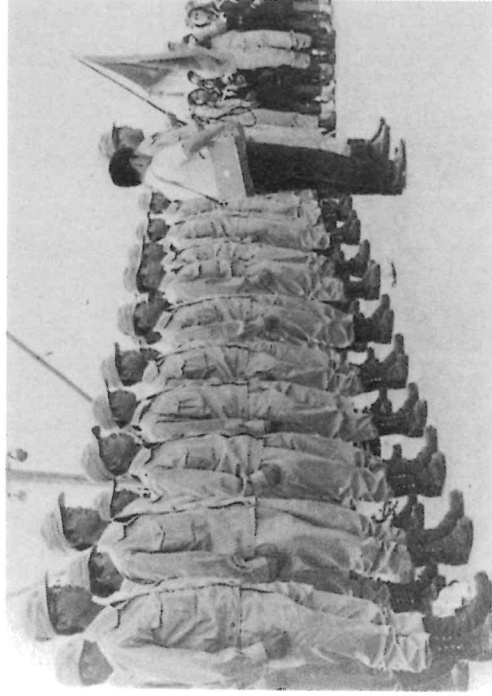
この世に身をおきて、心死する者あり。身は亡んでも、魂は存在する者あり。心、死すれば生きるも益なし、魂、存在すれば死して

も損なきなり。

死しても不屈の見込みがあれば、いつでも死するべし。

生きて大業の見込みあれば、いつまでも生きるべし。」
とっております。

長澤先生の説いた青年隊魂が、我らに伝わって存在している限り、



那覇港で挨拶する長澤先生

先生の精神は不朽のものではないかと確信をすところでございます。

最後に産業開発青年隊誓いの言葉

一つ我らは 産業開発に挺して、人類平和のために 尽くさんことを誓う。

一つ我らは 友愛と団結をもって、理想の社会をつくらんことをを誓う。

一つ我らは 不屈の信念をもって、創設の大業を達成せんことを誓う。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げまして送る言葉といたします。

先生、背中を押し続けて

伊達 徹

(産業開発青年隊同窓会副会長)

長澤亮太先生は私にとって吉田松陰先生と同等の存在でした。長澤先生に出会ってからこそ、今の私が在ると実感しています。

不屈の信念と実行力、人に対する思いやり。人を信じ、人に破れて人を憎み、人を救し又人に出逢う。この人に対する暖かい専大な心。ひたすらに人類の平和を考えて青年教育に一生を賭けて生き抜いて駆け抜けて行った。それは私の人生の生き方の方向性を教えて

くれました。有り難うございました。

今、私の手元に幕末の志士50数人の集合写真があります。薩摩、長州、土佐藩士達の集まりです。西郷隆盛、坂本龍馬、高杉晋作、伊藤博文、桂小五郎等の吉田松陰先生の門下生がたくさん映った写真です。この人達が明治維新を成し遂げました。

私も長澤亮太先生の意志を引き継ぎ地球環境を浄化する事業を大義名分と信念を持ち続けて遂行しますので向こうの世界から背中を押し続けて下さい。どうか、ご冥福をお祈り申し上げます。

旺盛な好奇心とロマン

中島準二

(産業開発青年隊同窓会参考)

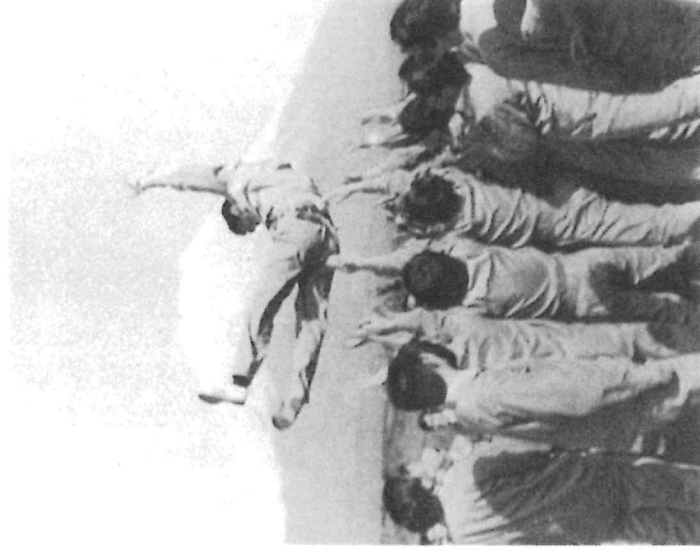
所長とは中訓での3年間いろいろと、また、卒業してからもしばしばお会いしたが、今では何もかもなつかしい思い出である。

3年間においては、細かいことは忘れてしまったが、私は執行部だったので、問題があると何かと所長室に出かけて行って直談判をしたが、怒らずによく聞いてくれたものである。

また、私が普通科か高等科の時の建大祭の折、所長が奥さんとちっちゃな息子さんを連れて見に来られ、我が少林寺拳法部が開いていたラーメン屋に立ち寄りられたことがあった。所長も

「寄稿」で掲載した写真はいずれも「産業開発青年隊二十年史」より

少林寺拳法部の所属だったので気を使ってくれたのであろう。私は息子さんにラーメンを作ってあげ、息子さんが一生懸命に食べていたのを感じている。今にして



指導員を胸上げする研修生

思うと、はたしてラーメンが美味かったかどうかあやしいが、もう40年以上も前のことである。卒業してからは所長が富士宮の山宮にOBの赤池氏のお世話で「富士山修験道場」として居を構えられた

が、そこにOB数人と何度かお邪魔したことがある。一人暮らしの部屋には何故か酒がいっぱいあり、それらを飲みながら楽しいひと時を過ごしたが、道場の壁に作られた天井まである棚に武具と一緒に吉田松陰な

どの本がいっぱい並んでいたことを思い出す。

また、OB会が青年隊の記念碑を作るにあたって、所長の言葉を大きな御影石に刻んだが、その文言づくりを所長と一緒にやったことも楽しいことであった。

折しも3月11日の金曜日に発生した東日本の巨大地震は、M9.0、震度7という空前絶後の規模であり、10mを超える津波が沿岸の町を襲い、リアス式海岸の地形のすばまった所では20mとも言われるこの濁流によって複数の町が壊滅的な被害を受けた。犠牲者は1万人を超すだろうと報道されている。東京電力福島第一原発の事故も追い打ちをかけ、未曾有の惨状である。

所長がいたらすかさず災害救助隊の派遣を指示していただろうと思われるところである。

東京大学を出て建設省の事務次官になった人が産業開発青年隊を発足させ、ブラジルなどへの派遣や1万人を超える若者

を教育して産業開発に従事させたことは、やはり偉大なことである。富士山を愛し、旺盛な好奇心とロマンをもった憎めない恩師であった。OBとしては、その志操をわが身の生き方に継承させなければならないだろうと思っている。



拳納演武 少林寺けん部 (富士宮浅間神社)



思い出を語る光森同窓会会長

産業開発青年隊の生みの親である故・長澤亮太氏を偲ぶ会が20日、富士宮市の富士教育訓練センターで開かれた。会場で

全国から150人が集い 思い出を語り合う

産業開発青年隊の生みの親 故・長澤氏を偲ぶ会

地から約150人が集まり、長澤氏や青年隊の思い出を語り合った。偲ぶ会では、元建設学校中京訓練所訓練課長の吉留三利氏が長澤氏の経歴を紹介した後、関係者が偲ぶ言葉を語り、同窓会会長の光森

「先生は青年隊にとっても、無一人だと話した。富士宮市ロタリークラブの元会長の佐野義幸氏は「先生の後ろにあるものに感謝を感じた」と、九州人会会長の村山茂氏は「日本に対する志の高さに最も感銘を受けた」と、中京訓練所元講師の花輪孝樹氏は「そろそろ全国で新しい青年隊をつくら



青年隊記念碑をバックに長澤先生ご夫妻

偲ぶ会(実行委員会決算報告)

(収入)	科目	予算額	決算額	備考
1	会費	1,000,000	824,000	68名分宿泊代含む
2	賛助金(生花代)	1,500,000	1,377,290	
	合計	2,500,000	2,200,290	

(支出)	科目	予算額	決算額	備考
1	事業費	2,000,000	2,019,160	
	(1) 大会費	1,000,000	1,326,660	祭壇、懇親会費、送迎費等一式
	(2) 会報発行費	1,000,000	692,500	会報1000部 DVD400枚
2	会議費	200,000	100,107	
	(1) 会議費	150,000	100,107	偲ぶ会打合せ等
	(2) 交通費	50,000	0	
3	事務費	100,000	79,306	コピー・封筒・発送等
4	資料館維持積立金	200,000	1,717	
	合計	2,500,000	2,200,290	

(提供) 建通新聞社静岡支社

編 集 後 記

長澤門下生としてのひとつのけじめとして「長澤亮太先生を偲ぶ会」を開催するにあたり、臨時の代表者会議を平成22年7月2日に実施。役員からは、同窓会としての「偲ぶ会」開催はもちろん初めてのことであるため、侃々諤々の先着諸氏の輪の中で、皆様に「開催してよかったよ」と言葉をかけてもらえる「偲ぶ会」にしようと思つたのが、つい昨日のこのように感じます。この会報発行は、ひとりでも多くの方の心の中に「長澤先生を留めていただきたい」とその一心で発行させていただきました。編集作業半ばの平成23年3月11日の東日本大震災において、亡くなられた方々に哀悼の意を表しますとともに、ご遺族ご親戚の皆様にご心より、お悔やみ申し上げま

す。また、被災者の皆様にご心よりお見舞い申し上げ、被災地の一日も早い復興を祈念いたします。青年隊同志の皆様は、被災状況につきましては、まだ詳細がわからずに事務局としての力の無さを痛感しているところでもあります。このたびの震災は、青年隊精神を「試されている」と感じざるを得ません。天は我々に地震、津波という試練を与え、そこからどう立ち上がるかを…。戦後の焼け野原から復興した日本人の魂を「もう一度呼び戻せ」と命じているかのように…。最後に「偲ぶ会」開催にあたり、多くの皆様から生花代をいただきました。多くのメンバーの協力もいただきました。本当にありがとうございました。次回60周年大会(平成25年11月頃を予定)でお会いできることを楽しみにしています。

(菅井文明)

青年隊OB会報 特別号 長澤亮太先生を偲ぶ	平成二十三年八月十日発行 発行者 産業開発青年隊同窓会 発行責任者 光森 徳雄 編集担当 菅井 文明 事務局 富士教育訓練センター内 静岡県富士宮市根原宝山四九二一八 TEL 〇五四四八五〇九六八 FAX 〇五四四八五〇一三三六
--------------------------	---

